

DUNGEON PRINCESS

# ダンジョン プリンセス

おてんば姫は冒険中

## 蒼井村正

表紙イラスト：しを。



試し読み版

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『ダンジョンプリンセス おてんば姫は冒険中』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



DUNGEON PRINCESS

# ダンジョン プリンセス

おてんば姫は冒険中

蒼井村正

表紙／しを。

## 登場人物紹介

---

### Characters

#### エルレイン姫

明朗快活、活発な性格で、結構わがまま。貧乳ロリ体型なのを少し気にしている。ミュウに、ほのかな想いを抱いているが、素直に想いを伝えられない。

#### ミュウ

家庭教師兼遊び相手として雇われた博物学者の卵。わがままだが可愛いところもある姫に恋心を抱いてしまっている。

壁に繁茂した夜光ゴケが、洞窟内をぼんやりと照らし出している。

「こっちだ、行くぞ！」

少しいらついた声を岩壁に響かせ、少女は足早に歩を進めてゆく。

年の頃は十代半ば、キリリとした眉が、気の強そうな印象を与えるなかなかの美少女である。

やや赤みを帯びた金色の髪をセミロングに伸ばし、耳当ての付いたパッド入りの乗馬帽をかぶっていた。

メリハリに乏しい、細身な肢体にまよっているのは、遠乗りのときに着用する厚手の乗馬服。

背には、小振りなザックを背負い、燃料式のランプを手にかけている。

彼女の名はエルレイン。

王位継承順位こそ低いものの、周囲の人々からは「姫」と呼ばれる身分である。

「エル姫様、本当にこっちでよろしいのですか？　そろそろ、引き返した方がよろしいのではないのでしょうか？」

エルレインの愛称を呼びつつ、姫の後をついて行くのは、彼女よりも一つ二つ年上らしい少年だ。

男子にしては線の細い色白な少年で、姫と同じく乗馬服に身を包み、大振りなザックを

背負っている。きちんと櫛の入った黒髪頭の額には、大振りなヘッドランプを装着していた。「さつきからごちゃごちゃとうるさいぞ、ミュウ！ お前は黙って、わたしについて来ればいいのだ」

勝ち気な声を岩壁に響かせながら、エル姫はズンズン足を進めてゆく。

「は……はあ……」

ミュウと呼ばれた少年は、不安げな表情を浮かべながらも、忠実な飼い犬のように姫の後について行った。

見習い賢者である彼は、まだ十代の若さながら、その知識と、人当たりのいい性格を買われて、エルレイン姫の家庭教師兼従者に抜擢されたのだ。

本名は、もつと長つたらしいのだが、大仰な名前が気に入らなかつた姫に、ミュウという愛称を付けられ、以来、ずっとその名で呼ばれていた。

おてんばでわがままな姫を家臣たちがもてあます中、ミュウは文句一つ言わずに忠誠を尽くし、片時も離れず彼女の面倒を見ている。

「しかし、間もなく日が沈む時間ですし、そろそろ探検を切り上げてお戻りになった方が……」

遠慮がちな口調で、再度、引き返すことを促すミュウの鼻先に、ピシッ！ と姫の指先が突きつけられる。

「うるさいと言ったであろう！ 洞窟の中なら、朝であろうが夜であろうが関係なからう。あと少しで最下層のはずなのだ。黙ってついてまいれ！」

ここは、居城の地下に広がる地下洞窟。

貴族や王族が通う初等学校を卒業したエルレイン姫が、居城として与えられたのは、王都から少し離れた山岳地帯にある古城であった。

十数年前までは、城の地下に広がる洞窟内で、魔法薬の原料であるキノコや菌糸類の栽培が行われていたが、より高品質で安価な原材料が輸入できるようになった今では、栽培施設も休止状態で放置され、荒れ放題になっている。

好奇心旺盛で探検が趣味というおてんば姫にとって、迷宮のように入り組んだ洞窟は格好の遊び場所であった。

従者のミュウを連れての洞窟探検も、これで三度目。最深部を目指して、姫の気まぐれのままに突き進んでいる。

「む、この横穴は怪しいな、秘密の匂いがするぞ」

いきなり立ち止まった姫は、地下深くに向かって緩やかに傾斜した横穴の奥を、身を乗り出して覗き込む。

「姫様、危のうございます」

今にも転げ落ちてしまいそうな姫の胴に手を回し、あわてて支えるミュウ。

乗馬服越しに、細身でしなやかに引き締まった肢体の感触が伝わってきて、少年従者の胸を甘く疼かせた。

「わたしを子供扱いするな！　む……結構傾斜しているな。奥に広間があるようだぞ」  
ミュウの手を煩わしげに振り払い、さらに大きく身を乗り出して横穴を覗き込んだエル姫の足が、濡れた岩肌でツルリと滑った。

「きゃわあ！」  
可愛らしい悲鳴を洞窟内に響かせ、おてんば姫は傾斜した横穴を滑り落ちてゆく。

「姫様あ！」  
とつさに姫の手を掴んだミュウであったが、小柄で華奢きゃしゃな少年従者の力では、滑落の勢いを止めることができなかつた。

「わああああ〜！」  
「きゃはわあ〜！」

悲鳴の二重奏を響かせながら、姫と一緒に、ミュウも斜面を滑り落ちてゆく。

二人が転がり出た先は、数本の太い鍾乳石に天井を支えられた、ダンスホールぐらいの広さはあるようなドーム状の空洞であった。

夜光ゴケが壁の所々に生えているため、周囲の様子はおぼろげながら見て取れる。

この空間も、以前は栽培施設として使われていたらしく、人の手で整備された形跡があ

った。

「姫様、お怪我はございませんか？」

自分の身よりも先に、姫を案じるミュウの目の前で、尻餅をついていた姫がゆつくりと立ち上がる。

「大事ない。このコケがクッションになったようだな」

エルレイン姫は、乗馬服に付着したコケの滓を払いながら立ち上がる。

淡いピンク色をした、フワフワした感触のコケが、洞窟の床一面を覆って、それが姫とミュウの身体を受け止めてくれたようだ。

「ふむ、だだっ広いだけで、特に面白そうなものはないか……。期待外れだな」

好奇心旺盛な姫は、不満げな表情を浮かべて周囲を見回す。

「時間も時間ですし、そろそろ戻るといたしましょう。この斜面は、足元が滑りやすく登れそうにないですね。他に出口は……。ウツ！」

ヘッドランプの明かりを天井に向けたミュウは、低い呻き声を上げて身を強張らせた。

「どうした？」

固まったままの少年従者をいぶかしげに見つめ、首をかしげて問いかけるエルレイン姫。

「姫様、天井を見て下さい……」

「天井？ ……む、あれは何だ？」

少年従者の視線を追って、天井を見上げた姫の眉が怪訝けげんそうに寄せられる。

ランプの光がぼんやりと照らし出した洞窟の天井で、黒い影が何十も蠢うごめいていた。

大きさは、鳩ぐらい。ネズミの顔をひしゃげさせたような、お世辞にも可愛うごめいとは言えぬ面相の小動物が、身を寄せ合って逆さまにぶら下がっている。

「おそらく、サバトコウモリの一種かと……比較のおとなしい生き物ですから、刺激しない限り危険はありません」

頭上数メートルで蠢くコウモリの群れを見上げながら、賢者見習いの少年は説明する。

「そうか、危険がないなら、捨て置けばよい」

好奇心旺盛な彼女らしからぬ淡泊な口調で、エル姫は言った。

さつきから姫の様子がおかしい。

そわそわと落ち着きなげに周囲を見回し、何かを探しているようだ。

「姫様、いかなさりました？」

「なっ、何でもなし！ 少しここで待っている」

急いた口調で言った姫は、ひとときわたい鍾乳石の陰へと歩を進めてゆく。

「あ、あの、どちらへ？」

ミュウは、忠実な飼い犬のように、姫の後を追う。

「用足しだ、バカ者！ ついてくるな！」

眉をつり上げて怒鳴るエルレイン姫。さすがに恥ずかしいのか、頬が赤らんでいる。ひんやりと肌寒い洞窟内を長時間散策していたため、身体が冷えて尿意をもよおしてしまつたらしい。

「それはなりません！」

ミュウは、いつになく厳しい口調の声を上げる。

「なぜだ!? おまえにそんなことまで禁止される筋合いはないぞ！」

理不尽な禁止の声に反発した姫は、眉をつり上げて少年従者にくつてかかる。

「大声を上げてしまつて申し訳ございません。ご説明いたします。サバトコウモリは、おとなしい生き物ですが、あるモノの匂いを嗅ぐと、途端に凶暴になるのです」

けんか腰で詰め寄ってくる姫をなだめながら、賢者見習いの少年は説明する。

「あるモノとは何だ？」

「女の人の……おっ、オシッコです……ですから、用足しはしばし我慢してただけませんか？」

言いくさそうに顔を伏せながら、ミュウは告げる。

「なっ!? なんだと! なんと破廉恥な生き物だ……」

天井で蠢くコウモリの群れを、忌々しげな表情を浮かべて見上げるおてんば姫。

「くうう……でも、もう、我慢できないッ! わたしは用を足すぞ! コウモリが襲つて

きたら、おまえがなんとかしろ！」

こみ上げてくる尿意に耐えかねた姫は、乗馬服に包まれた細身な肢体をモジモジとくねらせながら、高飛車な口調で命じる。

我慢の限界なのか、乗馬ズボンに包まれた両脚は内股気味に寄せ合わされ、やや広めの額はじつとりと汗ばんでいる。

「無理ですよ！ ボクは、剣の腕前はからつきしなんですから」

なさない声を上げるミュウ。彼は、豊富な知識の持ち主であったが、戦闘能力は皆無に等しいのだ。

「肝心なときに使えぬ奴……う……もっ、漏れそうだ……」

切なげに眉を寄せ、モジモジと身悶えするエルレイン姫。

「……致し方ありません、ボクがなんとかします！」

何かを思いついたらしい見習い賢者の少年は、覚悟と羞恥の入り交じった複雑な表情を浮かべて姫に近づいてきた。

「どっ、どうするのだ!？」

コウモリの群れとミュウの顔を交互に見つつ、切羽詰まった声を上げるエルレイン姫。

「ボクは非力ですから、狂乱したコウモリからエル姫様を護って戦うことはできません。でも、この事態を乗りきる方法があります！」

少年従者は、さらに一步、姫に近づいて告げる。

「なんでもいい、早くなんとかしろ！」

膀胱が決壊寸前の姫は、焦った声を上げた。いつもは好奇心いっぱい光をたたえている勝ち気な瞳も、今にも泣き出してしまいそうに潤んでおり、彼女が激しい尿意に耐え続けていることがうかがわれる。

「でっ、では、姫様のお小水……ぼっ、ボクが全て飲み干します。それなら、オシッコの匂いは外に漏れません」

あまりにも意外なミユウの言葉を聞いたエル姫の顔から表情が消え、次の瞬間、羞恥で真っ赤に染め上げられる。

「なにいいいっ！ そっ、そんな恥ずかしいことができるものかッ！ ふぁ……ダメだ。これ以上怒鳴らせるな。漏れて……しまう」

怒鳴り声から一転して声を潜め、失禁寸前の尿意と、羞恥心の板挟みに身を震わせるおてんば姫。

「今はこれしかないのです！ これは緊急避難！ 姫様、どうかご決断を！」

「わ、わかった……それしかないのだな？ でっ、では、早くするがよい！」

少年従者の知識には全幅の信頼を寄せている姫は、恥ずかしげに目を伏せつつ、乗馬服のズボンと下着をあわただしくズリ下げ、下半身をあらわにする。

そして今、恋する少年従者は、姫への忠誠心が試される一世一代の状況に置かれている。「でっ、では、参ります。一気に進らされてしまうと、こぼしてしまう可能性があります。辛くても、我慢して小出しにして下さい」

恥ずかしげに目を閉じて立った姫の足元にひざまずいたミュウは、荒くなりそうな呼吸を必死に鎮めつつ、突き出された恥丘にそつと顔を寄せた。

「わかったから、早くしろ！ もつ、もう……ンンッ」  
身を強張らせ、ギクギクツ、と決壊寸前の身震いするエル姫。

「はい……んふう……ッ」

忠義心とともに、妖しい悦びを覚えつつ、ミュウは姫の小振りな尻を抱き寄せ、少女のワレメに唇を吸いつかせた。

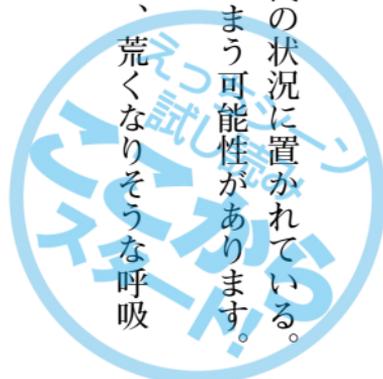
フワリと柔らかな少女の恥丘全体を、少年賢者の口が覆う。

「ひゃうっ！ なっ、何か、温かくて……変な感じだ。あううう」

冷えきった恥部を温かく包んでくる口腔粘膜こうこうの感触に、エルレイン姫は立ったままプルプルと身を震わせる。

「ミュウッ！ だっ、出さず。もつ、もう、出しても、いいのだな？」

我慢しきれなくなったエルレインは、勝ち気でおてんばな姫らしくない小声で、小水排泄の許可を求める。



「……」

姫の秘部に吸いついたまま、ミュウは目だけで頷いてみせた。

「あああ……出す、ぞつ、……ンンンンッ！」

消え入りそうな声を上げた華奢な肢体が、恥部をグツ、と突き出すようにして反り返る。口腔に含まれた秘部が、クパア……と開き、尿意に震える膣前庭が剥き出しになった。

「ふあ……ンッ……んふう……ンッ！」

硬く目を閉じ、かすかに汗ばんだまろやかな下腹をいきませて、放尿を開始しようとする姫であったが、羞恥と緊張で尿道括約筋が強張っているのか、なかなか排泄が始まらない。

（姫様……出して下さい）

上目遣いでおてんば姫の顔を見上げたミュウは、そつと差し伸べた舌尖で、羞恥に震えるワレメを舐め上げ、ツンと尖った尿口をチロチロとくすぐって放出を促す。

「きやはうっ！ んんんんんっ」

敏感な尿口を舐められ、引きつった声を上げた姫の下腹部が痙攣けいれんした次の瞬間、耐えに耐えていた膀胱が決壊し、放尿が始まった。

プシッ！ プシイッ！ シャツ、シャアアッ……シャツ、シャワアッ、シユパッ、シユパッ……シャパアア、シユワツ、ジユワツ、シユワアッ……。

熱い尿水が、ミュウの口腔内に断続的にほとぼし進った。

「ンッ……ンンッ……ンンンンンッ」

喉の奥で呻きながら、ミュウに言われたとおり、小出しに放尿するエル姫。

放出を一旦止めるたびに、排泄快感に震える小振りなヒップが、キュッ、キュッ、と緊張する。

羞恥に震える小さな手が、少年従者の髪を痛いほど握り締めて、怒濤の勢いで襲いかかってくる放出欲求と羞恥に抗っていた。

「んふう……ンッ、ゴクッ……ゴクッ……ンッ……ゴクンッ……」

髪を引つ張られる痛みさえも快感として受け止めつつ、ミュウは姫の小振りなお尻を抱き寄せ、一層強く秘部に吸いついた。

愚直なまでに忠実な少年従者は、熱い迸りを一滴もこぼすまいと、少女の秘裂にむしゃぶりつき、柔らかな肉の丘全体を口に含んで飲み干してゆく。

「ふわああ！ アッ、ンッ……くふううん……ッ、ほっ、本当に、くひッ、ふあ、のっ、飲んでいるのだな？ あああ、まだ、出るっ、あんッ……はああ」

ふつくと盛り上がった恥丘全体を、熱く潤んだ少年の口に吸い込まれる初めての体験に、引きつった声を上げながら放尿を続けるエルレイン姫。

シャアアッ、ピュルッ、プシッ、シャアッ、シユパッ、シャパアア……。

細身な身体が、ピクッ、ピクンッと緊張し、秘めやかなワレメの奥から、姫を苦しめて

いた熱い尿水が断続的に射出される。

(姫様、一滴残らず、出して下さい……)

被虐的な悦びに震えながら、ミュウは姫の秘裂にむしゃぶりつき、放出に合わせて優しく吸い上げる。

ひざまずいて飲尿を続ける少年従者のペニスは、乗馬ズボンの内側ではち切れんばかりに勃起し、ビクビクと脈動して今にも弾けてしまいそうだ。

(姫様の、大切な部分に、キスしている。姫様の逆らせたものを、飲んで……)  
倒錯的な悦びに包まれ、少年従者は姫の秘裂を吸い続ける。

「ふあ……はあああ……ンッ……ま、まだ……出る……ンンンッ」

満足と安堵の入り交じったため息を漏らしながら、おてんば姫は、排泄の快感に酔いしれた。

「んああ……はあ……ハア、ハア、ハア……ンンッ」

やがて、全てを出し終えた姫の身体が、ブルブルツ、と震えた。

身体の強張りが解け、緊張していた尻たぶから力が抜ける。

(もう……おしまいですか?)

一滴もこぼすことなく、姫の尿水を飲み終えたという満足感と同時に、一抹の物足りなさを感じるミュウ。

「姫様……ッ！」

姫に対する愛おしさを炎のように燃え上がらせた少年は、こみ上げる衝動のままにキスを仕掛け、唇を奪う。

「ンッ……んふう……ん、む……クチュ、チュッ……はふ……ンッ、チュパ……」

エルレイン姫も、拒む様子もなく口づけを受け入れ、積極的に舌を絡めて応じてきた。ミュウの指を咥え込んだままの膣口も、小刻みに収縮し、火照った裸身が、妖しくうねるヴァギナの奥底からこみ上げてくる快感に悶え続けている。

ひとしきり口を吸いあい、こみ上げる感情のままに舌を絡ませた二人は、どちらからともなくキスを中断して見つめあった。

緊張していた膣壁も、弾力を増して程良く緩んでいる。

「いいぞ……ミュウ、子宮に、お前の白いドロドロを注いでくれ……」

喜びの涙に濡れた瞳で少年を見上げ、ペニスの挿入をねだるエル姫。

「しっ、しかし……」

「このわたしがいいと言っておるのだ！ ふあ……ンンッ、こつ、ここまですておいて、逃げるのは男らしくくないぞ！ はやく、お前の熱いので……わたしの中を……ンッ」

欲情に蕩けてはいても、勝ち気な光の消えていない瞳で少年従者を見つめ、小振りな尻を小刻みにしゃくり上げて挿入をねだる姫。

「わかりました……では、参ります」

膣口からゆっくりと指を抜いたミュウは、すでに破裂寸前まで猛った牡器官をあてがい、慎重に挿入してゆく。

ヌプ……クチュツ……。

指でほぐされた膣粘膜は、少年の小振りな亀頭を啜え込み、火傷やけどしそうな熱さを伝えてくる。

「ふあ！ あ……はああ……ンンッ！」

切れ切れの声を上げながら、姫は生まれて初めてのペニス挿入にのけぞった。

おてんば姫ゆえ、日々の乗馬で処女膜が自然断裂していたのか、初めての挿入にもかかわらず、姫は破瓜の痛みを感じていないようだ。

姫の身体に負担をかけぬように注意しつつ、少年はぎこちなく腰を進め、初めての膣挿入をなんとか成功させた。

指よりもずっと太い牡器官を受け入れた膣粘膜は、ドクツ、ドクンツ、と熱く脈動しながら、挿入された肉柱にまとわりつき、締めつけてくる。

「姫様……入りましたよ。ああ、温かくて、夢のようです……」

淫らな夢で見たことはあっても、絶対に実現しないと思っていた姫との交合に、歓喜の声を上げるミュウ。

「ふあ、わたしの中、ミュウのものでいっぱいになっているぞ。んはああ……こんなに心地いいことが、この世にはあったのだな。気が遠くなりそうだ。ミュウ、もっと強く抱いていてくれ！」

熱く潤んだ声を上げたおてんば姫は、細い腕を少年の首に回し、きつくすがりついてくる。無言のまま抱き返したミュウの胸板に、小振りな乳房が押しつけられ、意外なほどの存在感と、激しく高鳴る心臓の鼓動を伝えてくる。

「……ミュウ、これで、男女の営みはおしまいなのか？」

従者の裸身にしっかりと抱きついたまま、姫は、まだ物欲しそうな口調で問いかけてくる。しっかりと抱擁されて安心したことで、持ち前の欲張りな好奇心が頭をもたげてきたようだ。

「ええっと、まだまだ先はありますが、ボクはその……未熟者として」

熱い膣粘膜に包まれているだけで、今にも弾けてしまいそうなペニスを必死になだめながら、見習い賢者の少年は、照れた表情で告げる。

思春期の少年ゆえの好奇心で、色々と性愛技巧の知識は蓄えているのだが、実戦経験が皆無なのだ。

「未熟でも良い。この先を……全部、教えるのだ」

快感への期待に瞳を輝かせ、姫は甘い吐息で少年の鼻先をくすぐりながら命じる。

「どこまでできるかわかりませんが……まず、このあとはボクが前後に動いて、姫様の身を擦るのです」

抱擁を解いて身を浮かせた少年は、姫の身体に体重をかけぬように苦心しつつ、ぎこちない挿挿を開始する。

ヌプツ、クチュ……クチュ、クチュ、ヌチュツ……。

お世辞にも立派とは言えぬペニスが抜け落ちぬように細心の注意を払い、短いストロークで膣壁を擦る。

「ソツ、こんな……ふああ、動いたら……アツ、アツ、アツ、も、もつと、動いても、いぞ……ひやふう！ ソツ……」

初体験する摩擦快感に酔いしれ、貪欲に快感を貪るエル姫。

「う……くふううう……姫様の中、プルプルしていて、ボクのものに絡みついています」

ペニスが蕩けそうな快感に、今にも射精してしまいそうな呻きを漏らし、尻たぶを痙攣させるミュウ。

動かずにいたときには気付かなかつたが、姫の膣内は細やかな肉壁が密生しており、それが龟头冠を甘く搔きくすぐって、腰が抜けそうな快感を送り込んでくる。

「ふあ！ アツ、……擦れて、ソソツ！ 痺れる……熱くなって、どこかに飛んでいってしまいそうだ！」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**